
三分の一の饅頭

チェンキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三分の一の饅頭

【Nコード】

N1005L

【作者名】

チェンキー

【あらすじ】

私が楽しみにしていた饅頭を友人が勝手に食べた。私は饅頭の事で詰め寄るが、友人は言い訳を始め……。

「饅頭が2個あって人が3人居たとしたらどうする？」

「どうするって……饅頭を切り分けるでしょ、普通」

二月の終わり頃。部屋に置いてあるパイプ椅子に腰掛けている鳴海に熊谷は言った。その部屋はサークル棟の二階の端にある。ドアには「映画研究部」という名札が貼られていた。部屋の隅にある棚には、プロジェクターやカメラ、DVD等が置いてある。器材で部屋のスペースをある程度割かれているが、元々部屋が広いので窮屈に感じることは無い。

今、その部屋に熊谷と鳴海しかいない。

「確かにそうだ」鳴海はうなずく。「しかし、そうすると必ず3人に均等にいきわたるわけじゃない」

「どうということ？」熊谷は思わず訊ねる。

「簡単な数字だけだったら出来ると思う。しかし、単純に計算してみよう。饅頭が2個で人が3人。つまり三分の二だ。三分の二を数値にしてみれば0.66……。他にも六等分や九等分でも出来るがそっちの方がややこしい。数値的に見てそれと同じように切り分けるのは不可能だ」

「確かにそうね」

こいつは何を言っているんだ、と熊谷は内心で呟きながら適当に相槌を打つ。

鳴海は足を組み替えながら続ける。

「ということは薫が最初に言った様な切り分けるのは無理だ。饅頭をきつちり三等分にするのは難しい。俺には無理だ」

「私になら出来ると思うけど」

「最初は俺もそう思ったよ」鳴海は溜息をつく。「だけど実際にやると難しいんだよな」

鳴海は暢気に笑った。机に置いてあったお茶を一口飲み、息を吐

く。

窓から覗ける景色は穏やかなもので、冬にしては暖かった。季節外れの暖かさを覚えるのは、熊谷は鳴海が原因ではないかと思えた。

いつだって彼は笑顔を絶やさない。どこか飄々としている態度で、周りの空気に溶け込んでいく。

何故か鳴海が近くにいと落ち着くのだ。昂る感情はもちろん、雰囲気や空気ですら静められる。さすが心理学を専攻することだけはあつかもされない。

「だから俺ならこうする」鳴海は少し誇らしげに言った。「饅頭は食べたい。だけど分けるのは無理。ならば手段は一つ」

鳴海は人差し指を立てた。まるで名探偵が犯人を当てるような感じだ。「ひとりに黙ってふたりでこっそり食べることに」

どこから見ても幼稚な結論を誇らしげに、鳴海は言った。そんな彼を見て、思わずため息が漏れる。

「もっと色んな手段はあったでしょうに」

「その多くの中でこれがもっとも良い方法だ。まさに真理に基づいている」

「言い訳に真理なんて言葉使うの、鳴海ぐらいだ」

真理、という言葉まで使い始めたので、熊谷はさすがに会話を続けるのが馬鹿らしくなった。こいつは自分がやる事はすべて「真理だ」と誇らしげに言うだろう。

彼が学んでいるのは心理学ではなく真理学ではないかと思う。それとも心理学は真理をセオリーにしているのかどうか。心理学というのは想像がつかない。

「だからさ、鳴海」熊谷は口調を強めた。「私は何で黙って饅頭を全部食べたのかって聞いているの。それじゃ答えにならない」

「それは……」鳴海が言葉に詰まる。どこか言い訳を探しているようだった。「六等分や九等分でも難しいと思ったからさ」

「だから違うって」少し口を荒げた。

鳴海もさすがに空気を読み、観念したように黙った。だが、表情は相変わらず陽気なままだ。

鳴海が熊谷の顔を見る。

「いや、だってね。そこに饅頭があったから」

「登山家みたいなこと言う」熊谷は力ない声で言った。

「そんな事を言うから、日本は毎日犯罪があるんだ」

「犯罪が毎日無い国なんてどこにある？」鳴海が訊いた。

「アイルランドは無かった気がする」

熊谷が曖昧に言った。昔、英語の授業で習った気がする。

「そうなの？」鳴海は熊谷の曖昧な答えに食いつく。「今度、その国に旅行に行ってみようかな」

「私はアメリカを勧めるな。鳴海にはスラム街に行つて、路上でさまよつて欲しい」

「アメリカは最悪だ。あそこにあるのは、暴力と裁判とジャンクフードだけだよ」

その時、部屋のドアが開いた。入ってきたのは女性で、腰まで届くロングヘアで細い体つきをしている。サークル部員の橘だった。右手には買い物袋をぶら下げている。

「あれ。熊谷さん、来てたんですか？」

彼女は言葉と裏腹に意外ではなさそうに言った。

「ついさっきね。少し目を離したら楽しみにしていた茶菓子を食べられたの」

橘は熊谷と鳴海を交互に見て「ああ」と呟く。

「その件は私からもすいません」

橘が大きく頭を下げた。長い髪が垂れ下がり、顔が見えなくなる。おそらく、鳴海が言っていた2人目は橘だろう。彼女もそれについてには隠す気はなさそうだ。鳴海と違い、すぐに自分の非を認めるところは彼女の長所だ。

「そうそう。その代わりと行ってなんですがね」橘が頭を上げ、右手の買い物袋を見せた。「さっきスーパーに買い物に行っていたん

ですよ。そのついでに和菓子屋で饅頭買ってきました。鳴海さんに頼まれて」

「え、ウソ？」

「ウソと言われても。私が持っているものはそれなワケですし」

橘は買い物袋から箱を取り出して見せた。確かにそれは熊谷のお気に入りの茶菓子だ。

意外だった。鳴海が人に気を遣うなんて。そんな事は天変地異があっても起こるか分からないのに。

「ホントは熊谷さんの分も残すつもりだったんですけどね」

橘が言った。

「鳴海さんが饅頭を三等分にしようとしたんですけど、失敗しちゃって。どうにか戻そうと六等分や九等分にしたんですけど、案の定ぐちゃぐちゃになったんで私と鳴海さんで食べたんですよ。ぐちゃぐちゃになった饅頭なんて食べたくないでしょう？」

「確かに」何度目だろうか、と思いつながら相槌を打つ。

「だから鳴海さんが『買い物ついでに饅頭も買ってきてくれ』って頼んだんですよ」

「ばれないように戻すつもりだったんだけどなあ」

鳴海がぼんやりと呟いた。

「最初から素直に言えば良かったのに」

「最初から何事も無かったように出来れば万々歳だ」

「それも真理？」

「ある意味真理かも」

橘が悪戯っぽく笑う。つられて熊谷も笑った。さっきまで怒っていた自分が馬鹿みたいだ。

「ああ、そうそう」熊谷は思いついた。

「春日、早速だけど饅頭ちょうだい」

「そんなに食べたかったんですか？」そういう彼女は既に、饅頭を口に銜えている。

橘は買ってきた饅頭を箱から一個取り出し、熊谷に渡した。

熊谷はその包みを開いた。掌に収まるサイズで、表面がこんがり焼かれている楕円形の饅頭が顔を覗く。熊谷のお気に入りの和菓子だった。

それを、両手で器用にきつちり三等分に分けてやった。おいしそうな漉し餡がぎっしり詰まっていた。

そのうちの一つを鳴海に渡す。鳴海は目を丸くしていた。

「言ったでしょう？ 私には出来るって」

熊谷は笑って言った。橘も、やはり笑う。鳴海は三分の一に分けられた饅頭を凝視している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1005/>

三分の一の饅頭

2010年10月8日15時06分発行